

正林護先生の喜寿をお祝いで

村川逸朗

早いもので正林先生が退職されてもう17年も経つのかと月日の経つ早さに驚くばかりです。心から正林先生の喜寿をお喜び申し上げます。

思い返してみれば、今から26年前（昭和54年）の、現在の長崎県教育庁学芸文化課の前身である文化課に嘱託として奉職するとき、面接試験での出会いが最初になります。その当時の思い出としては、里田原遺跡の木器の整理中で職員及び嘱託で木器の実測を行っていたのが印象に残っています。その時の正林先生の渾名が木器のPEG（ポリエチレングリコール）保存処理にかけて“含浸処理先生”でした。

その後、3年間の九州横断道路（大村地区）の調査の後、昭和57年5月10日～同22日と8月2日～同10日に実施された、弥生時代の遺跡である北松鹿町町の大野台遺跡E地点の調査が、正林先生とご一緒させていただいた最初かと思えます。調査初日から支石墓が検出され、最終的には38基の支石墓が確認されました。この調査地点は調査終了の2年後国指定史跡となりましたが、現場での正林先生はあくまでも厳しく、正直なところ、雨で現場が休みになるのが密かな楽しみでした。宿舎だった国民宿舎歌ヶ浦荘の玄関のシュロの木が、風で揺られて雨が降っているように聞こえ、雨じゃないのかと残念に思った日が何日もありました。

同じく昭和58年3月27日～4月2日までの7日間、北松鷹島西岸の海に面したラグーン地形の遺跡である、縄文時代後・晩期の鷹島町三代遺跡の調査を行いました。

翌年の昭和59年には、以前調査された縄文時代早期末から前期を主体とする、北松田平町つぐめのはな遺跡の調査報告書の作成作業で、土器を正林先生が、石器を私が行いました。

昭和60年の3月19日から同月28日までは、縄文時代後・晩期の遺跡である福江市中島遺跡の調査を行いました。正林先生が好きだからということもあると思いますが低湿地及び河川の調査が先の三代遺跡、この中島遺跡、そしてこの後の里田原遺跡と続きます。この中島遺跡ではドングリピットが12基確認されました。

この中島遺跡の調査の後、息つく暇もなく昭和60年4月8日～5月10日にかけて、いよいよ縄文時代後期の遺跡である対馬峰町の佐賀貝塚の調査へと突入します。この佐賀貝塚は、今考えても非常に良い遺跡（時期的に限定できる単純遺跡）だったと思います。この遺跡の評価は、鹿笛や、骨角器、朝鮮半島産のノロジカ等によって多くの人に周知されていると思いますが、私は石鏃に注目したいと思います。特筆すべきは、出土した石鏃のほとんどが剥片鏃だということです。この佐賀貝塚の調査によって土器と石器文化の関係が不可分だとの認識を強くすることが出来ました。このときの正林先生の渾名は“笛吹じいさん”でした。

この鹿笛については、正林先生のライフワークとも言えるもので、信州の山中の“マタギ”を訪れ鹿笛の吹き方を教えてもらった話を聞きました。鹿笛を吹くためには、それをじゅくじゅくに唾液でぬらさないと鳴らないそうで、それを渡されて吹いてみた話や、長

崎市近郊の八郎岳に登り、鹿笛を吹いて雄鹿をおびき寄せる話。結局、奈良公園まで出かけていき、たぶんNHKだったかと思うのですがTVにも出演し、ホログラムによって現世の鹿と鹿笛の波長の違い等も画面で見た記憶が残っています。

この後は、昭和60年11月～昭和61年6月の間、弥生時代の遺跡である北松田平町の里田原遺跡の調査に従事します。冬の里田原遺跡調査の厳しさは、上司であった故藤田和裕さんから聞いていたので、一冬勤まるだろうかと不安感もありました。案の定玄界灘からの北風は冷たく、里川の水も冷えていました。しかし、“正林マジック”と申しますか、厳しい中にも楽しさがあり、月に一度は作業員さんと演芸会を行ったりして、何とか調査を無事に終えることが出来ました。

現場の作業では、作業員の方はおばちゃん達が多く、皆ヤッケを着ていて作業中は後ろ姿のお尻しか見えないのですが、正林先生はお尻を見てわかるという特技の持ち主で、正しい名前を呼んでいました。

正林先生は、現場の達人で、大野台遺跡調査の時も、調査終了後、調査現場の道脇で早速作業員さんを交えて“反省会”が始まりました。この道がジョギングコースである町立診療所の先生も引き込んで大いに賑わったものでした。マジックには“種”がつきもので、正林マジックの正体はお酒です。昼間の厳しい調査とオフタイムのくつろいだお酒で作業員さんとも一体となって調査を行うことができたのだと思います。ちなみに、この頃の渾名は、正林先生の肩書きが主任指導主事で県教委で一番の高給取りと言われていたことから、“酒飲指導主事”と言っていました。

この昭和58年～61年にかけての4年間は、今振り返ってみても内実ともに充実した期間でした。もちろん調査とともに報告書もある訳ですから、大変だったことも正直なところではありますが……。

昭和63年度末には、長崎県の文化財担当者の職員採用試験があり、文化財保護主事として、正林先生退職の補充として、正式に採用されることとなりますので、今振り返ってみるとこの4年間は非常に重要な意味があったのではないかと感慨深いものがあります。私自身の勉強にもなりました。正林先生には公私ともにお世話になりました。感謝の念以外見つかりません。ありがとうございます。また、調査中に至らないところや御迷惑もおかけしたと思いますが、どうぞこの場を借りてお詫び申し上げます。もう時効でしょうか？

どうぞこの後も、お体に気をつけられ、ご自身の研究の深化と、後進のために厳しくも暖かいまなざしを送っていただければこの上ない幸せはありません。